

# 精神分析からみた 幼児期の創造性

北見 芳雄

最近団地の母親の間に「ゴキブリ坊や」という愛称が流行しているとのことである。二、三才の幼児がチョコマカ部屋中を探りあき叱られると台所に逃げこむからだとのことであるが、ちょうど長男について全く同じ悩みを毎日繰り返している私たち夫婦も、もう手をあげて共感したものである。しかしこの愛称には吾が子の傍若無人のふるまいに手を焼いている親の慨きばかりではなくまた、おとなの多くが既に失ってしまった旺盛な好奇心や行動性をみせている吾が子の成長力にその将来の夢を托している親の喜びも含まれているのだと思う。幼児の手におえないいたずらはまさに人間の創造性の原始的な発露だからである。

## 無意識と創造性

精神分析からすると、幼児のこういう旺盛な好奇心や即行性は、幼児の特徴としての、外界や内界への配慮（遠慮、気がねなど）なしに自己中心的にその本能欲求を追求しようという、快感原則に支配された無意識心理に主としてもとづく本能的創造性ともいうべきものであり、この点おとなの現実原則の上に立った意識的自覚的な自我の機能としてのいわば文化的創造性とは質的に異なるものではあるが、それだけにまた幼児の衝動生活は、将来の本当の意味での創造性の原型或いは潜在的可能性とでもいうべきものとしての意義をもつものなのである。

このことはおとなの創造性にあってもまた根元的には無意識と深い関係をもっているとみられる事実によってもうなずけることである。つまりおとなの創造的生産的思考というものの起原が往々にして「思いつき」「アイディア」「インスピレーション」とよばれるような形で、いわばおとな的常識的知識や論理のワクの外から浮びあがってくるという現象である。ブレイン・ストーミング（頭脳襲

撃と訳している人もある。よきアイデアを生み出すための集団討議法。日本でも最近この方法を採用してその結果を企業方針に反映させている所が現れている)の創始者A・オスボーンは、よきアイデアが生み出されるための四原則として (一) よいわるいの判断をいれないこと (二) 自由奔放性を歓迎すること (三) 思いつきの量を尊重すること (四) 個人から出されたアイデアを利用することをあげているが、これらの原則がそのまま幼児の思考の形式や内容にもあてはまりうるように思われるのは興味深いことである。またすでにおとなの意識に存在する知識や技能も無意識のバック・アップによっていよいよその真価を発揮しうるものであるが、これになにも遠く昔の劍豪や名匠の妙技が「無我」「無心」の境から生れてきたというような例にまつまでもなく我々誰もがその日常生活の中で身近かに経験しうることである。例えば就寝前にはどうにも解決の糸口がつかめなかったような難問題が朝の寝起きに改めて考えなおすと案外すらすらと解決するといったまさに「果報は寝てきて」的经验には、睡眠中に開放され整理された無意識の生産的影響があると思われるのである。これは睡眠中に展開される夢の思考が機智とユーモア、稚氣と空想に溢れる世界であることにも現れていると思う。従って覚醒時には常識と分別の世界に生きているおとなもその無意識では童心や詩心がいつまでも生き続けていると言えようである。

以上創造力は意識の活用に関係あること、そしてそれは発生的に幼児の衝動性と関連あることを述べたが、筆者は幼児教育の最も基本的な課題がこの幼児の本能的創造性をいかに育てあげて豊かな文化的創造性にまで結実せしめるかということにあると思うものである。

### 無意識の禁制と創造力

精神分析学はノイローゼの研究に始まりその治療的実践を通して体系づけられてきた学問であるが、数多くのおとなや子どものノイローゼに接した分析者が共通して抱く感慨の一つは、彼らの無意識に根強く働いている禁制(ブレイキ)があたり意識面での優れた知性や豊富な学習内容を効果なきものとしていられるばかりではなく、更には神経症状という重荷を生んで、そのエネルギーを浪費させているという事実であり、またその原因が幼児期の誤った躰げや教育に多く由来しているという発見である。このため分析学が幼児の教育に對して早くから繰りかえし要求してきたことは、幼児の本能衝動に對する過度の禁止や制限によって幼児の創造性を涸渇させないようということであった。

児童分析の開拓者としてのアンナ・フロイドは「親と教師のための精神分析」のなかで、「子どものこのような発達上の禁止や障害の治療に従っている精神分析者は、まさに教育をその最も悪い側面

から知るようになる。そしてこんな教育はまるで雀をうつのに大砲を使うようなものだ。そんなことをするよりか、子ども部屋では礼儀や作法については割引きしてやって、つまみ食いをしたい子、父親気どりの子、裸体でとび回りたい子、性器をいじりたい子などには、それぞれ自由にしたいことをやらせるのがよかったのではないか。これら幼児的な快感行為なるものは、いわゆる良い教育といわれるものが、子どもにもたらす傷害に比してはたしてどれほど重大な困った結果をきたすものであろうか。良い教育の結果子ども的人格内部に分裂し対立する二つの部分がつくられることや、人を愛する力が減少してしまつて喜びを味わうことも、一生の仕事をしとげることでもできないようなおとながでるということのような事実と比較してみた時、いったいどういふことになるのであろうか。このような事態をはっきりと知らされた分析者は少なくとも自分に關するかぎりはこのような教育には加担しまい。自分の子どもたちは、こんな方法で教育するよりはむしろ自由に放任しておこう。幼いころから強制を加えて子どもを人格的不具者にしてしまうくらいなら成人したときに少しはわがまま者ができる方がまだましだと考える」とまで極言しているが、けだし分析者としてのいつわらざる実感であつたのであろう。

といつて勿論このことは決して分析学が幼児の教育や躰けの不要を説いているということではない。幼児の本能的創造性が成人の文

化的創造性にまで高められてゆくためには、その過程で子どもは当然種々の知識や技能、欲求不満にたえる力、社会的適応法などを身につけてゆかねばならないのは当然のことである。幼児期の本能衝動に対する過度の抑圧が成人期の創造性の不毛や神経症を結果するのと同じく、幼児期における本能衝動の無思慮な充足や放任が意志薄弱、忍耐力のなさ、気分的などの性格や適応障害を残すことも精神分析学の指摘するところなのである。

### 性格形成と創造性

それでは幼児の本能的衝動のエネルギーを涸渇させることなくしかも現実適応的な創造性を育成するには幼児に如何なる教育がなすべきかについての精神分析学の考え方をのべるには、その性格形成理論にふれねばならないが、これについてはすでに本誌でその基本的なことがらをのべたことがあるので（第六十一巻二・三号）ここでは躰けのあり方とそれに応じて形成される子どもの性格や生活態度について、模放性と創造性に関して若干のことを述べるに止めたいと思う。

精神分析学では、子どもの性格は基本的には幼児期における躰けのあり方を子どもが心の内部に撰り入れることによつて形成されると考え、こうして作られる性格を大きく昇華型と反動形成型に分けている。前者は幼児の衝動性への理解の上に幼児の心身の発達段階や

理解力に応じた躰けの内容が幼児の自我と同調的（支持的）に与えられる場合で、この際の幼児は親の躰けを自主的に吸集して段階的に幼児的衝動性を生産的、創造的な自我の活動にくみこみ（昇化）つつ環境への適応的な性格を作りあげてゆくことになる。これに対して後者は、躰けが幼児の発達段階や理解力を無視した親の一方的な要求や、時間をかけない性急な態度で与えられる場合で、この際の幼児は親の躰を他律的に摂取（うのみ）にさせられ、衝動の満足も許されなければ昇華の機会も与えられないという葛藤の中におかれることから、幼児の自我は自らの衝動の防衛にのみそのエネルギーを消費させられ、従って外的環境の模倣にのみ汲々とするような（反動形成）非創造的な性格傾向ができあがるとするのである。

× × ×

最後に以上に述べてきたことから、幼児の創造性育成の好ましいあり方とでもいうべきものを次の七つの項目にまとめて結びにかえたいと思う。

(1) 幼児の衝動性は善悪の価値以前のエネルギー的問題として、教育の原動力であり、創造性の原型であるという広いうけとりかたをもつべきこと。

(2) 幼児がその衝動を無言な形で直接発散しうるような場と時とが与えられるべきこと。（この点とくに自由な遊びに關して制約の多

い都会の幼児にとって、幼稚園教育の意義は極めて大きいといえよう。）

(3) 幼児に、親や教師に愛され認められているという基本的な安定感が与えられるべきこと。（愛情は正に精神の糧である、真の創造性は、自己に対する安定感の上のみ発揮されるものである。）

(4) 幼児の自我の発達に依じて本能的衝動を昇華しうるための機会が与えられること。（幼稚園教育においては、幼児の個性に応じた遊びの指導が重視されるべきであり、この点で子どもの遊戯治療やおとなのレグレーション療法のある方は参考になるであろう。）

(5) この際両親、教師自身の人格的感化が配慮されること。【子どもは信頼するおとなの態度をまねる（同一化）ものである。創造的な子どもは創造的な親や教師の生活態度から生れる。】

(6) 幼児にはいろいろな個性をもつ友人との広い交友の機会が与えられること。（この点親の価値判断から幼児の交友を制限することは流動性ある思考力や創造性に発展すべき芽をつみとることになる。）

(7) 子どもの興味に即応しつつ必要なる知識、技能や欲求充足を延期し、欲求不満に耐えうる習慣が序々に教育されること。（幼児期の創造教育も子どもの健全な人格形成の一環としての広い視野のもとに行なわれるべきものである。）

（東京理科大学助教授、東京教育精神衛生研究所員）